

「抗微生物薬適正使用の手引き」について

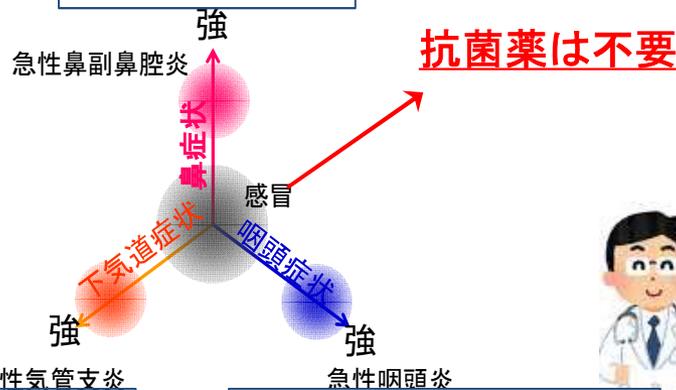
- ・細菌が原因でない場合の抗菌薬処方が多い（特に広域抗菌薬の使用量が多い。）。
⇒細菌性であるか判断が難しいにもかかわらず、患者から抗菌薬の処方が求められる。
- ・日本で使用される抗菌薬のうち約90%は外来診療で処方される経口抗菌薬である。

- ・外来診療の現場で活用できる「抗微生物薬適正使用の手引き」を公表（平成29年6月1日）。
- ・患者数や不必要な処方の割合が多い風邪と下痢症について解説。

風邪

診断・治療の考え方

重症度を確認



抗菌薬は不要

肺炎を鑑別

迅速抗原検査等で確認

患者・家族への説明内容

- ・感冒の場合、対症療法が中心。抗菌薬は効果なし。
- ・ゆっくり休むのが一番の薬。
- ・改善しない場合には再受診を。

下痢症

診断・治療の考え方

- ・細菌性・ウイルス性に
関わらず、多くは自然に治るため、**抗菌薬は不要**。
- ・対症療法や水分
摂取の励行が重要。
- ✓ 全身状態（日常生活への支障程度）
- ✓ 海外渡航歴
- ✓ 血性下痢
- ✓ 発熱38℃以上
等を踏まえて、便検査や
抗菌薬処方を検討。

患者・家族への説明内容

- ・対症療法が中心。抗菌薬の使用は、腸内の善玉菌を殺す可能性あり、糖分や塩分の入った水分補給が重要。
- ・感染拡大防止のため、手洗いを徹底し、家族とタオルを共有しない。
- ・日常生活に支障が出た場合等には再受診を。